父たちの河

本間芳男作　市川禎男絵

父たちの河

本間芳男作　市川禎男絵

●著者　本間芳男（ほんま・よしお）
1933年、新潟県巻町に生まれる。
現在、新潟県五泉市立川東小学校教諭。
日本児童文学者協会、北陸児童文学協会会員。
主な作品に、『死なないルウ』『越後国の赤い川』*『ならぬことはならぬものです』などがある。
〔現住所〕〒959 新潟県中蒲原郡村松町本町1

●画家　市川禎男（いちかわ・さだお）
1921年東京に生まれる。
戦前、児童劇団に関係。日本版画協会根市賞、日本童画会賞、共著『子どもの舞台美術』でサンケイ児童出版文化賞を受賞。
『希望の漂流』『マヒトよ明日がある』*『ミキの赤い手ぶくろ』*『すてた猟銃』『雪ぼっこ物語』ほか児童図書のそうてい・さしえ多数。日本美術家連盟会員。
〔現住所〕〒171 東京都豊島区長崎1－11－12

（＊印はあすなろ書房刊）

父たちの河　　昭和52年12月15日　初版発行

著者　本間芳男
発行者　山浦常克
発行所　株式会社 あすなろ書房
東京都新宿区弁天町107　石嶋ビル　〒162
TEL (03)203-3350　振替・東京 9-63084

JASRAC
日本音楽著作権協会
承認第526623号

柳沢印刷・ナショナル製本協同組合

© Y. Honma. 1977

万一落丁・乱丁本がございましたら、ご面倒でも直接小社宛お送り下さい。送料小社負担にてお取りかえ致します。

NDC 913/240p/22cm　　8393-61821-0060

戦争をしていても、
平和を愛する軍人がいました。
戦争がなくとも、
真の平和の意味を知らない人がいます。

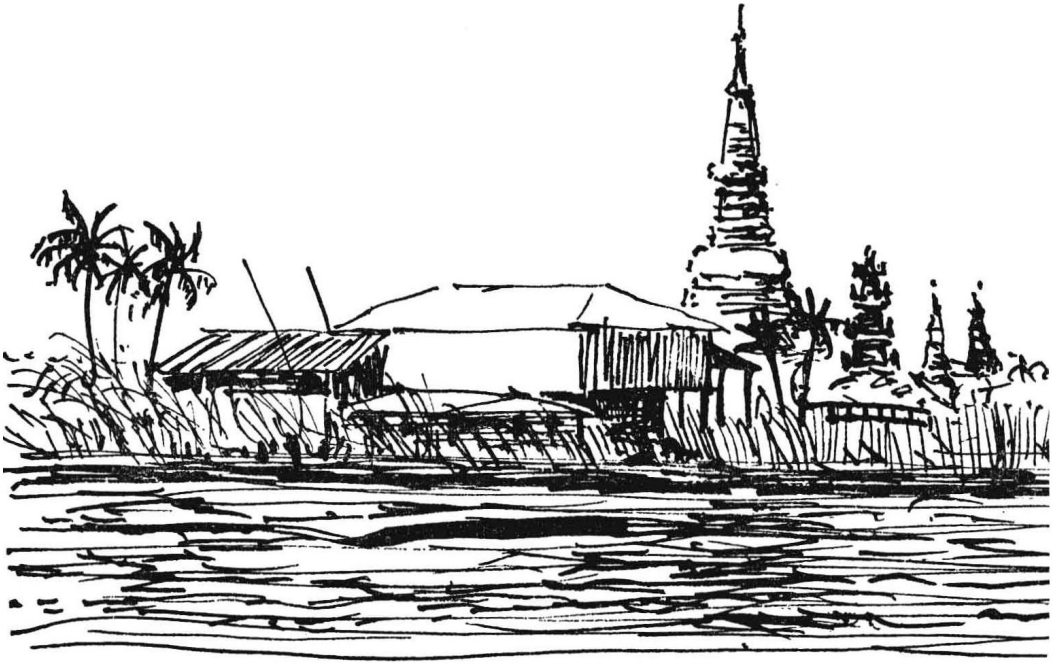
戦争と平和は、
対語ですが、反対語ではありません。

父たちの河■もくじ

1 雲の上から 4
2 ビルマへ 19
3 首都ランゲーン 31
4 古都マンダレー 44
5 マンダレーから 58
6 チンドイン河 77
7 死者たちの道 94
8 霧のチンドイン 111
9 靖国の森 128
10 まぼろしの靖国街道 139
11 密林の中で 156

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

12 さらば、父たちの河(かわ) 169
13 ホテルの庭で 178
14 ジゴン村にて 198
15 ポニーの国よ 215
おわりに 229



1　雲の上から

目をつむると、ゆうべの雪の駅が見えます。

夜汽車で家族と別れるというのは、せつないものですね。ホームの明かりの中で、じっとうつむいていた佐和子の白い顔と長い髪が、まぶたに焼きついています。もう中学生ですもの。おとうさんのるす中は、よろしく願いますよ。六年生の重男は、てれくさいのか、むっとおこったような顔でつっ立っていましたね。

そしておかあさんは。

佐和子と重男と順平に見えないように、おとうさんの手をにぎってくれました。おとうさんは、そのやわらかい手をにぎり返して目をじっと見ました。だいじょうぶ、元気でいってくるよ。三人の子どもをたのんだよ——そんな意味でした。なにしろ、三人の子どもがいるので、夫婦で別れのあいさつがしにくかったのです。ちょっとさびしそうでした。

三年生の順平。おまえがいちばんはしゃいでいましたね。黒い毛糸のぼうしをかぶって、兄ち

ゃんのお古のアノラックを着て、少し大きめの長ぐつをはいて……。順平は、汽車といっしょに駅のホームを走ってくれました。

汽車の中からは、こな雪の中にいる家族のすがたがよく見えました。何度も窓をふいて、みんなのすがたが見えなくなっても、いつまでも駅の明かりを見つめていました。

佐和子、重男、順平。

駅の明かりが、暗い雪の夜の中に小さく小さく消えたとき、おとうさんの遠い遠い記憶がよみがえったのです。

おまえたち三人も、おかあさんさえも知らない、おとうさんだけが知っている三十何年か前の、あの日を思いだしていたのです。

あの日とは、おじいちゃんが兵隊にいった日のことです。ゆうべと同じホームでした。おとうさんは順平と同じ三年生でした。

よく晴れた秋の日で、

「京賀清一郎君、ばんざぁい。」

村長さんも小学生も、親せきの人も見送りに来、手に手に日の丸の小旗をふって、軍歌をうたっていました。はなやかな勇壮な見送りで、家族に悲しむひまを与えないにぎやかさでした。少年だったおとうさんはブラスバンドの大きな音で、気持ちがうわずっていて、これで自分の父親と、最後の別れになろうなどとは、想像もしていませんでした。むしろ、軍服を着た父親をたの

もしいと思っていたほどでした。

母は——。戦地へいく軍人のいちばん大切な妻でありながら、目立たないところで、日の丸の旗をかくすようにして立っていました。黒いもんぺをはいて、上にはま新しいエプロンをつけて。そのエプロンには、きちんとしたおり目がついていたことを、今でもよく覚えています。

妻と子どもを残して、京賀清一郎——つまり、おまえたちのおじいちゃんは、どんな気持ちで汽車に乗っていったのでしょうか。

雪の中を走る列車の中で、あらわれては消える遠い人家の灯を見ながら、おとうさんは、おじいちゃんの気持ちをまさぐっていました。

おじいちゃんはすぐ、中支（中国の中央部）へわたりました。そして昭和十八年、ビルマへいったのです。上等兵でした。よく年、ビルマの密林の中で死んだのです。

ビルマで。

京賀上等兵は、何を思い、何を見ながら死んだのでしょうか。

ビルマ。

密林の中には、どんな草花がさいているのでしょうか。そこからは、どんな色の空が見えるのでしょうか。おじいちゃんの眠る土の上を、どんなにおいの風がふいているのでしょうか。おとうさんは、それが知りたいのです。

広い広い河があって、その河をわたりきった兵隊だけが、ぶじ日本へ帰れたそうです。その河

の広さを、おとうさんはこの目で見たいのです。

いってきます、ビルマへ。

おじいちゃんのお骨に会ってきます。息子として、おとうさんはどうしてもいきたいのです。

昭和五十年一月二十日　　羽田空港ロビーにて、おとうさんより

佐和子、重男、順平どの

佐和子へ

一万メートルの上空で今、おまえに手紙を書いています。

海と空とが同時に見えて、まるで魚眼レンズをはめた宇宙人のような気持ちです。窓のすぐ下には、雲海が見えます。雲の下は雨なのでしょうか。

地球の上に雨がふろうが、どんな政治がなされようが、戦争があろうが、一万メートルの上空はつねに太陽が見えて、すみきっているのです。

日本航空七三一便。ジャンボジェット機の中は、乗客三百六十余人。大半は日本人ですが、いろいろな人種が乗りあわせています。髪や目やはだの色のちがう人たち。言葉や宗教や思想のちがい。それぞれの人が宙にういている機内の空間に、だまりこんで乗りあわせているという感じ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

です。

国際線だから、あたりまえの話ですよね。でも、三十年前の世界に佐和子、こういうことはありえなかったのです。

なぜなら。

世界中が二つに分かれて、戦争をしていたからです。戦争に参加した国ぐには、ドイツ、イタリア、日本を相手にアメリカ、イギリス、フランス、ソ連など、いずれも北半球の北の大国でした。そのとき戦場になったのが、おもに北回帰線と南回帰線とにはさまれた小さな、力の弱い国ぐにだったのです。

ごめんなさい。

せっかく、戦争について話してあげようとしたのに、中断してしまいました。となり座席の村田さんのぐあいが悪くなったのです。

知っているでしょう、村田さん。そう、金沢市の人で、佐和子が小学生になった年、おじいちゃんのお墓参りにきてとまっていった人。

村田さんがまん中の座席で、おとうさんが窓側、利根川さんが通路側に席をとって三人ならんでいたのです。ちょうど沖縄上空にさしかかって、青い海に緑の島が見えだしたころです。きゅうに村田さんは、胸をおさえました。

スチュワーデスがすぐに見つけ、
「いかがなさいました。」
「ええ、まあ、だいじょうぶなんですが。」
からだをななめにして、村田さんの背中をさすっていた利根川さんが、自分のことのように答えました。村田さんは、太い首すじに油あせをべっとりとかいて、胸で息をしていました。
「飛行機は、はじめてですか。」
ピンクの地に、金銀の花もようの和服を着たスチュワーデスが聞きました。
「いや、ちょっと。」
「海外へは、はじめてですか。」
「三十年ぶりです。」
「三十年。」
彼女は目に表情をもたずに、からだ全体でわざとらしく驚いてみせました。
「ほほほほ、三十年前だなんて、わたしはまだ、生まれてはいませんでしたわ。」
病人の気持ちをまぎらわせようと、彼女はわざと明るく応対していました。その機転に、周囲の日本人はなんとなくわらいました。通路をへだてたイギリス人が、
「あなた若い、美しい、きものきれい。」
と、上手な日本語でわらいのなかまへはいってきました。青い目の、鼻の高い青年でした。組ん

でいた長い足をほどいて、左手の人差し指を村田さんに向け、「タイジョウブ、ですか。」と、好意の目で話しかけました。

すると村田さんは、きっと首をあげて利根川さんの手をほどき、

「ありがとう、楽になりました。」

と背すじをのばして、スチュワーデスにお礼をいいました。

そのいい方は、例のイギリス人をいかにも無視したように、おとうさんには聞こえました。それから両目を指でおさえて、考えこむように首をたれました。

「何かありましたら、よんでください。」

スチュワーデスがいってしまうと、利根川さんは、

「隊長、だいじょうぶでありますか。」

と、村田さんの顔をのぞくようにして聞きました。

「うん。いつもの病気だ。思いつめると、重たくて重たくて、胸の中がいっぱいになって、それでこう、息苦しくなって……。」

「その病気が、命とりにならなければいいが。」

「なにをいうかきさま。わしはまだまだ若い。老いぼれるわけにはゆかん。」

「ん。」

利根川さんの短い返事が、おとうさんの胸にずしんとこたえました。「同感。」とも聞こえたし、

「がんばろうぜ。」とも聞こえました。二人には共通の「やり残した仕事、やらねばならない仕事」があったのです。

佐和子。

おまえに、村田さんのこの持病について知ってもらいたいのです。これは、医者でさえなおすことのできない、えたいの知れないいたみなのです。利根川さんもおとうさんも、前からよく知っている症状なのです。

かれにはときどき、目の前がくらんで、脳天から血がなくなるような、目まいとも頭痛ともいえないような症状が起こります。頭痛はやがて、黒く重いかたまりとなって、胸の中に鈍痛となっておりてくるのだそうです。

これはおとうさんの想像ではありません。村田さん自身が、何度か話してくれたものです。

鈍いいたみは、やがて焼きつくように胸をおおい、次には全身、きずを受けたようないたみが走るといいます。

からだ中に、べっとりと油あせをかくこのいたみは、実に三十年間、村田さんを責めに責めつけたのです。

一種の「戦争病」です。

「自分だけ、生きている。」

戦友や部下の大部分が戦場でたおれたのに、自分が生きて日本へ帰れたことに、苦しみぬく村

田さんなのです。

「生きていて、すまない。」

それは、元軍人であった村田さんの、のがれることのできない宿命なのかもしれません。

村田さんは今、両手をももの上に組んで、おとうさんの横で目をつむっています。ややおちついたようです。大きなからだ、精悍そのものの顔。眠っているのか、心のきずと戦っているのか、動こうとしません。

京賀清一郎――つまり佐和子のおじいちゃんは、村田さんの部下だったのです。

おじいちゃんは、おとうさんが順平と同じ年に兵隊にいきました。そして重男と同じ年に、ビルマで戦死しました。

戦争が終わって、おとうさんが、佐和子と同じ年になったとき、突然、横内さんという人がたずねてきました。

おじいちゃんといっしょにビルマにいた人です。そして、おじいちゃんが死ぬところを見た人です。横内さんは、仏だんにおまいりしたあと、おばあちゃんの前に両手をついて、

「申しわけありませんでした。」

たたみの上に、なみだを落としました。

「上等兵どのは、敵のたまを太ももに受けられて、それが化膿し、ビルマへにげこむとちゅうで。」

おばあちゃんは、夫の最期のようすを、姿勢をくずさずに聞いていました。横内さんは、なみ

だをこらえ、からだをよじるように説明してくれました。
「密林の中でした。動けなくなった上等兵どのは、手りゅう弾をだいて。」
まるで手りゅう弾の爆発音が今でも聞こえるように、横内さんのからだは硬直しました。
「戦友として、自分は、上等兵どのに、何もしてやることができませんでした。めんぼくありません。おくさん。」
自分だけ生きて帰ったことを、横内さんは戦友の妻にわびたのです。
その話を聞いても、それからもずっとずっと、おばあちゃんは、
「あの話はうそ。おまえのおとうさんは生きている。ビルマに生きている。あの人が死んだとは、どうしても思えない。」
おばあちゃんは、死ぬまでそういいつづけました。
おとうさんのいなかった、おとうさん。
だからおとうさんには、「父親」というものが、どういうものか、まったくわからないのです。父親からしかられた記憶もないし、父親からつたえられた生き方というものもないし、父親がどんなに子どもを愛したかもわからないのです。そんなことを、さびしいと思いながら、おとうさんは生きてきました。
ときどき、おまえたち三人の父親として、自分はこれでよいのだろうかと、まようこともあります。父親を知らなくとも、父親として、自分の子どもを愛することはできます。しかしやはり、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com